同じく物語を好むといっても年長になるにしたがって男児は多く冒険的なものを好むし、女児は平和的なものを好む傾向が現れる。保育者である私どもは年令に応じ、とくに保育絵本は保育者が内容をよく研究理解した上で、最も適当な解説をして与え、保育にも充分活用するのでなければ、保育絵本は今後ますますかえりみられなくなるのではないか。またそうでないまでも一般絵本に興味が傾いて、保育絵本はつまらないものとなってしまうのでないか。私は懸念する。まことにささやかな研究であるが、日々幼児の保育を担当する方々に少しでも参考になれば幸せと思う。

Finger-paintingについて(4)

——親の態度と子どもの描画活動との関係——

大阪市立大学　小西勝一郎
並河信子

T.G.Alper らは中流家庭の親は下流家庭の親にくらべて、子どもの訓練において、比較的要求水準が高く厳格であるために、子どもたちが要求不満を起しがちであろうという仮設の下に、子どもたちに、より多くの不安傾向のあることを発見している。しかし、この際の親の態度については排泄の訓練の始期と終期を一応の基準としたほか、とくに留意していない。親子関係の研究については最近では、親子の直接の心理的関係の解明が重視され、親の態度をいくつかのタイプに分類している。Alper らの対象とした二階層の親についても種々な態度のタイプをもつ親が予想され、中流家庭の親のすべての態度が常に子どもに欲求不満を生ぜしめ、下流家庭の親が常にさうでないとは云いきれない。親の階層的区別より、態度別によることが、事実を一層明らかにするものと考えられる。子どもに対する親の態度の測定は必ずしも容易ではないが、上述の見地からわれわれはこゝで、Fels Parent Behavior Scale および Roff らの研究を参考にし、親の態度の五因子をとりあげ、これらの態度と子どもの指絵における描画活動との関係を検討し、さらにクレオン画との比較によって、この関係における指絵の特性を明らかにせんとした。

(a) 親の態度についてはＦＢＰＳを参考にして、三〇項目よりなる scale を構成して、大阪市立日吉幼稚園児の家庭を訪問し、主として母親を対象に、子どものしつけの方針、態度などについて対談しながら、実験者が観察した結果を scale の各項目毎に評価した。その結果を Roff によって、見出された親の態度の七因子について整理し、各家庭毎に各因子についての T 得点を求め、これをもってそれぞれの子どもに対する親の態度得点とした。なお今回の実験では、七因子のうちとくに子どもへの関心、民主性、寛容性、示唆性、親子間の調和の五因子について指絵との関係を検討した。

b　指絵実験の施行については、被験児を一人ずつ実験室に入れ、実験者が灰色の指絵具を使用して、描画方法を示した後、描かせこれを観察記録した。使用色は赤黄橙緑青紫茶および黒の八色で、その配列は被験者ごとに無意に変更した。指絵具との contact を最大にするため、今回からはスプーンを用意せず直接指でとらせた。その他の描画方法は大体前報告に準ずる。幼児一人につき最初自由画を一枚かかせ、一週間後、指定題すなわち「あなたの家の人をだれ

でもいいからかきなさい」といって家族をかかせた。クレヨン画も大体上述に準じた。

（なお本実験においては、担任教師に各々の幼児の行動特性の評価を依頼し、その結果と親の態度および指絵との関係を検討したが、これについては別に述べる予定）

実験対象

家庭訪問は大阪市立日吉幼稚園児の家庭八〇例（男児家庭が五〇例、女児家庭三〇例、うち年長児家庭六三例、年少児家庭一七例）で、指絵実験は、上述の家庭の子どものうち、男児四四名女子二一名に施行した。

実験期間

親の態度調査は昭和三一年九月より三二年一月まで、描画実験は三二年一月より三月まで行った。

結果

T・G・Alper らの研究と比較するため、主として評価項目を基準に整理をした。すなわち一六項目まで Alper はに準じ、以下はこちらで追加した。χ^2 検点の結果有意な差を示したもののみについて考察すると、Finger-painting による自由画では次のような結果がでている。

1 寛容でない親の子どもに直接かき始めるものが多い。
2 民主的傾向の高い親の子どもに用紙全体にかくものが多い。
3 民主的傾向の低い親の子どもに暖色をとるものが多い。
4 寛容でない親の子どもに茶や黒を用いるものが多い。
5 親の関心の低い子どもに混色するものが多い。
6 親の関心の低い子どもに三種以上の手の運動をするものが多い。
7 親子間の調和の低いものに指絵具を用いて、クレパス的なかき方をするものが多い。

同様に Finger-painting による指定画では、

1 寛容でない親の子どもに茶や黒を用いたものが多い。
2 民主的傾向の高い親の子どもに、かきなおしの傾向が多い。
3 親の関心の高い子どもに描画中のひとり言が多い。
4 寛容な親の子どもに最初紫をとるものが多い。

以上のごとく、Finger-painting では自由画では七項目、指定画では四項目有意な差を示すものがでているのに比較して、クレオン画では自由画、指定画ともに有意な差を示すものはまったくみられなかった。われわれの研究は Alper らの研究に比較すると有意差を示すものは少く、その内容においても必ずしも一致していない。Alper らの仮設をそのまま実証するとはいえないようである。これについてはわれわれの研究が被験者の年令、比較群の構成あるいは評価方法において、Alper らの方法と全く同じとはいえないことを考慮すべきだと思う。

われわれの仕事はさらに検討の余地が多いが、上述の結果から次のことが推定される。

(1) 親の態度と子どもの指絵活動との関係は親の態度因子によって異る。
(2) 親の態度の差はクレオン画よりも指絵活動により多くあらわれる。
(3) 親の態度と子どもの指絵活動との関係の存在は Alper らの階層差による発見と必ずしも一致しない。